

特集

# 新版教科書 Q&A

いよいよ、生徒たちが新しい教科書を手にします。新版教科書では、生徒たちの「国語の力」を育むため、これまで以上に、さまざまな工夫をしています。本特集では、先生方からいただいたご質問に答えるかたちで、その工夫の一部をご紹介します。

## 確かな言葉と豊かな人間関係を ——新版教科書に込めた願い

光村図書出版  
中学校国語編集部

東日本大震災から一年がたちました。私たちは、この未曾有の災害の中で、人々との結びつきの大切さを改めて痛感しました。復興への取り組みのなかで「絆」という言葉をよく目にしますが、それが象徴しているものは、まさに言葉の力、国語の力なのではないでしょうか。

言葉の力は、人を勇気づけ、心を開き、人と人をつなぎ、未来を切り開いていきます。私たちは、それを国語の教科書でしっかり具現化していくことが必要だと思えます。

こうした考えに基づき、新版教科書では、生徒たちの生涯に寄り添い、確かな言葉を身につけ、豊かな人間関係を築く力を培っていくために、次の三つを大きな柱に据えました。

### 一 学習のスタートとゴールが はっきりと見える教科書

国語は「どんな力が身につくのか」「ゴールが見えにくい」と言われます。そのため「学習目標を明確に立て」「自分が今何を学習しているのかわかり」「スタートと過程、ゴールがはっきり見える」ことを心がけました。

### 二 自分で考え、表現するための 具体的な手立てを示した教科書

単に「自分の言葉で考えよう」「わかりやすく話そう」などと言うだけでは、なかなか生徒は理解できません。ですから、そのための「観点」や「手順」「例示」を丁寧に示しました。

### 三 学んだことが 日常の場で生きる教科書

国語の授業で学んだことがその授業のなかだけに閉じずに、他教科や日常に、そして将来に生きるように、すべての教材で「実用の場、日常生活への還元」を意識しました。

本特集では、こうした方針のもとで編集しました教科書を、効果的にお使いいただくためのヒントをいくつか取り上げています。ぜひ、日々の授業の参考にしたいだければと願っています。

# Q1

小学校との連携はどう図られていますか。

# A1

一年の最初に、「言葉に出会うために」という新教材を位置づけました。

新版では、小中の技能の系統性を重視し、構成を工夫しました。また中一ギャップの軽減を図るために、一年の最初に、「言葉に出会うために」という新教材を位置づけました。言葉を自分のものとしていくために必要な技能を八つの観点（声を届ける・書き留める・本と出会う・調べる・言葉を読む・言葉を知る・言葉を楽しむ・いにしへの言葉に出会う）に分けて、それぞれの具体的な学習のしかたを丁寧に解説しました。

これは、いわば「プレ単元」というような考え方です。声の出し方やノートの取り方、図書館や辞典の使い方など、四月段階に先生方がまずは押さえられるという、基本的な学習事項を、小学校での学習を振り返りながらまとめたページです。

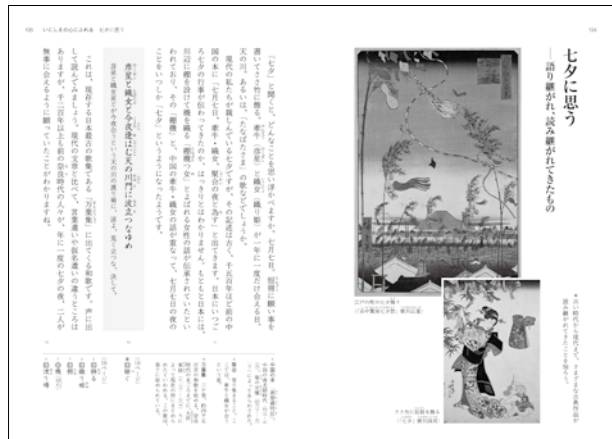
# Q2

学習指導要領の改訂を受け、古典教材の扱いはどう変わりましたか。

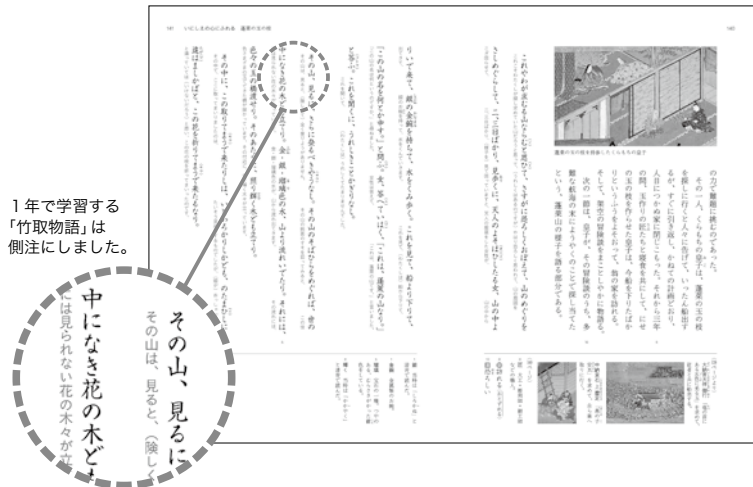
# A2

小学校で学習したことを緩やかに継承しながらも、古典の世界の奥深さを味わうところを目ざし、教材化を見直しました。

「七夕に思う—語り継がれ、読み継がれてきたもの」（1年）



「蓬菜の玉の枝—「竹取物語」から」（1年）



今回の学習指導要領には、「伝統的な言語文化」が新設され、小学校から古典が扱われることになりました。そのため、中学校では、小学校で学習したことを緩やかに継承しながらも、もう少し古典の世界の奥深さを味わうところを目ざしました。

一年の最初に新設した「七夕に思う」は、七夕にまつわる和歌や俳句を紹介した教材です。身近な伝統が、万葉の昔から受け継がれ、今の自分にもつながっていることを最初に感じてもらいたいと願いました。

中学校における古典の学習は、内容を理解し、よく読み味わうことが大切です。そのため、新版では、現代語訳を強化しました。「竹取物語」を側注にしたほか、各学年の最初の古典教材には、丁寧な対訳を付けています。

また、各学年の古典教材の後ろには、古典をテーマに書く活動につなげる「練習」教材を置きました。昔の人の考え方を読み取り、自分たちの考えを深めながら書くことを主なテーマにしています。

「言葉に出会うために」（1年）





## Q3

新しい文学作品はどういう観点で位置づけられましたか。

## A3

予定調和的にハッピーエンドで終わるのではなく、生徒に続きを考えさせるような、オープンエンドの構成をとった書きおろしの教材を、各学年に位置づけました。

書きおろしは、より教材に適した文章を作者と話し合いながら作り上げていくというメリットがあります。今回は、生徒と等身大の主人公であることと、作品の続きを生徒たちが考えることができるようなオープンな構成をテーマにお書きいただき、

各学年に位置づけました。一年「星の花が降るころに」、二年「アイスプラネット」、三年「蟬の声」です。  
一年「星の花が降るころに」は、少女期の繊細な感情を細やかに描きだすことに定評のある、安東みきえ先生にお願いしまし

た。この作品でも、心の葛藤や迷いが丁寧に描かれ、またラストの決意がありきたりでなく、考える余地のある文学性の高い教材です。  
二年の「アイスプラネット」は椎名誠先生にお願いしました。男の子が主人公で、魅力的なおじさんが出てきます。世界を肯定的に捉えること、視野を広くもつことなど、大切なメッセージが詰まった教材です。  
三年「蟬の声」は、浅田次郎先生にお願いしました。戦争を扱ったお話ですが、三年の進路を考え始めるときに、ふと立ち止まって大切なことは何かを考えさせられる教材です。



「星の花が降るころに」(1年)

「水をばしゃばしゃと顔にかけた。冷たかった。溶け出していた魂がもう一度引っ込み、やっと顔の輪郭が戻ってきたような気がした。」

友情の微妙なすれ違いや、ほのかな恋愛感情をテーマにした作品。



「アイスプラネット」(2年)

「いっぱいの『不思議アタマ』になって世界に出かけていくとおもしろいぞ。」

居候の叔父に寄せる複雑な心理と、広い世界へのいざないを描いた作品。



「蟬の声」(3年)

「和男は痩せた祖父の体を抱きかかえた。『今の話も、ないしょだぞ。いいな、カズ。じいちゃんとか約束しろ。』」

今まで秘めてきた戦争についての思いを祖父が孫に語る。戦争とは何か、改めて考えさせる作品。

## Q4

新しい説明文の特徴は何ですか。

## A4

科学的内容だけでなく、哲学や美術など幅広い分野の説明文を扱いました。また、「記録」や「論説」など、さまざまな文種を扱い、論理構成を吟味しました。

これまでの教科書では、科学的内容の説明文が多かったのですが、今回は、哲学や美術といった人文科学を含めた幅広い分野の説明文を扱っています。例えば、二年に「君は『最後の晩餐』を知っているか」という、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画について述べられた説明文を掲載しています。それから、論理構成のしっかりした文章という視点で、吟味を重ねました。論理構成といっても多様な形がありますが、頭括型、尾括型、帰納的あるいは演繹的な叙述、また、仮説・検証型など、題材に適した展開を工夫しています。学習指導要領でさまざまな文種が提示されたこともあり、例えば一年「シカの『落ち穂拾い』」は「記録」の文章で図表も多く、「非連続テキスト」に対応しています。二年「君は『最後の晩餐』を知っているか」は「評論(美術

評論)」、三年「ネット時代のコペルニクス」は「論説」など、多様な文章に出会うことができます。

説明的文章一覧 【 】は文種

|    |                                     |
|----|-------------------------------------|
| 1年 | 【説明】「ダイコンは大きな根？」 稲垣栄洋               |
|    | 【説明】「ちょっと立ち止まって」 桑原茂夫               |
|    | 【随筆】「江戸からのメッセージ—今に生かしたい江戸の知恵」 杉浦日向子 |
| 2年 | 【記録】「シカの『落ち穂拾い』—フィールドノートの記録から」 辻 大和 |
|    | 【説明】「流氷とわたしたちの暮らし」 青田昌秋             |
|    | 【説明】「やさしい日本語」 佐藤和之                  |
| 3年 | 【情報】「メディアと上手に付き合うために」 池上 彰          |
|    | 【説明】「五重の塔はなぜ倒れないか」 上田 篤             |
|    | 【評論】「君は『最後の晩餐』を知っているか」 布施英利         |
| 3年 | 【論説】「モアイは語る—地球の未来」 安田喜憲             |
|    | 【論説】「『批評』の言葉をつめる」 竹田青嗣              |
|    | 【説明】「月の起源を探る」 小久保英一郎                |
| 3年 | 【随筆】「光で见せる展示デザイン」 木下史青              |
|    | 【随筆】「『記憶』と『資料』」 沢木耕太郎               |
|    | 【論説】「ネット時代のコペルニクス—知識とは何か」 吉見俊哉      |
| 3年 | 【随筆】「アラスカとの出会い」 星野道夫                |
|    | 【評論】「聴くということ」 鷺田清一                  |

「君は『最後の晩餐』を知っているか」(2年)

美術をテーマにした説明文。「最後の晩餐」は修道院に描かれた壁画です。その迫力を表現するために、作品を折り込みページに掲載し、大きく見せるよう工夫しました。



Q5

生徒が主体的に学習できるように配慮はありますか。

A5

生徒が「自分で考える姿勢」を育てたいと願い、手引きを構造化しました。

ステップ①  
確認しよう

教材内容を確認したり、初読の感想を発表したりする設問。予習として家庭学習で扱うことも可能です。

「月の起源を探る」(3年)の手引き (P49)

今回、手引きの設問を三つのステップに構造化して「読みのプロセス」を明示しました。これは「読むこと」教材共通の構成です。

ステップ1「確認しよう」は、教材内容を確認する設問です。どんな生徒でも声を出したり活動したりできるよう意識しました。ステップ2「読みを深めよう」は、読解のための設問です。「学習の窓」と合わせて学習できます。ステップ3「自分の考えをもとう」は、ステップ1・2を通して深まった教材理解をもとに、自分と向き合い、自分ならどう考えるか、どう評価するか、といったところまでふれています。

この三つの設問を、さまざまな教材で繰り返し行っていくことで、「自分で考える姿勢」を習慣として身につけてほしいと願います。

ステップ②  
読みを深めよう

図表の読み取りや評論の読み方など、教材に応じた着目すべき点を挙げて、読み取りの手立てを丁寧に示しました。

ステップ③  
自分の考えをもとう

「自分ならどう考えるか」を問う設問です。繰り返し設問に臨むことで、自分の意見をもつ姿勢を身につけていきます。

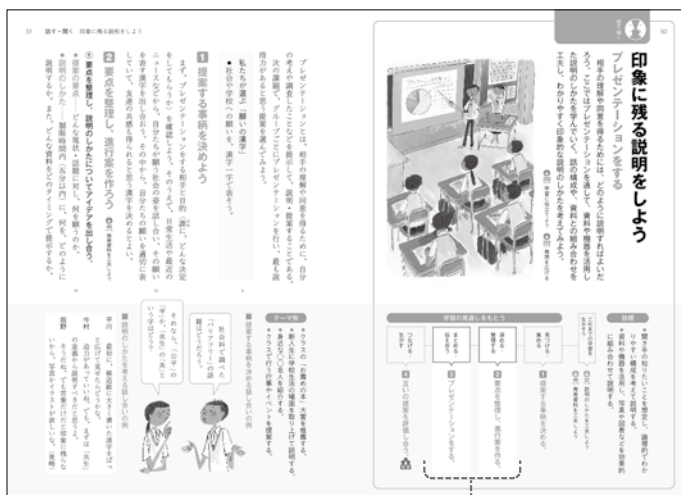
Q6

少ない時間数で効果的に指導できる工夫はありますか？

A6

「話すこと・聞くこと」「書くこと」では、限られた時間でメリハリのある指導ができるよう構成を工夫しました。

「印象に残る説明をしよう」(2年)



どこに重点を置いて指導すればよいかひと目でわかるよう、白抜き・太線で目立つようにしました。

●「練習」教材

身につける力を焦点化した、1時間・1ページのコンパクトな教材です。指導事項が絞られているので、観点別評価にも柔軟に対応できます。

練習「発表資料を工夫しよう」(2年)



「話すこと・聞くこと」「書くこと」の「学習の見通しをもとう」では、指導の重点箇所にあたる過程は白抜き・太線で目立つようにし、時間数がない中、メリハリのある指導ができるようにしています。

また、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の「練習」教材は、配当時数1時間、一ページ構成のコンパクトな教材です。従来の教科書では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材数が少ないため、学期ごとの観点別評価がしづらいというご意見がありました。また、取材や話題決定に時間がかかり、目標を達成するところまで行き着かないという声もありました。「練習」教材は、一つの力をピンポイントで身につける教材です。話し合い例や課題が初めから示されているので、準備の必要がありません。

「練習」教材で身につけた力を、その後の大きな活動の中で生かしていくという「習得→活用」の教材構成を図っています。